

第三勇新丸の十五年

捕鯨の現場を訪ねる

ノンフィクションライター

山川 徹

塗りつぶされた文字

出港が迫っていた。

二〇二一年六月十日午前九時過ぎ。下関港第一突堤では、船員たちが見送りにきた家族と数カ月の別れを惜しむ。目尻の皺まで日に焼けたベテランもいれば、高校を卒業したばかりの若者もいる。

船乗りたちとその家族を見守るように、独特なフォルムの船が停泊していた。

キャッチャーボート・第三勇新丸――。

クジラを探し、追い、仕留めるためだけにつくられた船である。二十人の乗組員は、この船でクジラをひ

たすらに追って、何カ月も航海し、食住をともにする。シャープな船体のやや前方に設置されたブリッジから、高いマストが突き出ている。船員たちは、海原に出るや、高さ一八メートルのトップマストに上り日々、クジラを探し求める。この船をキャッチャーボートたらしめるのが、船首に鎮座する大砲である。船の特徴すべてに、クジラに肉迫する乗組員たちの心情が投影されているように感じた。

第三勇新丸に令和の捕鯨を象徴する箇所を見つけた。左舷の「RESEARCH」の文字がペンキで塗りつぶされていたのである。

この数年、いや数十年、日本の捕鯨は複雑な航跡を残している。

振り返れば、戦後の食料難時代、南極海で捕獲したクジラ肉は、タンパク源として日本の食卓を支えた。一九六〇年代になると世界各国がクジラを捕りすぎた反動で、捕鯨に対して批判が集まる。クジラが絶滅の危機に瀕して国際問題になったのである。

ひとくちにクジラといっても、八十数種類もいる。絶滅の危機にあるクジラもいれば、逆に増加している

種もいる。日本は、数が増えたクジラを対象にした捕鯨継続を訴えた。だが、

聞き入れられず、南極海での商業捕鯨は停止に追い込まれる。それでも捕鯨

をあきらめない日本は、一九八七年から調査捕鯨をはじめ



「第三勇新丸」。船体に書かれた「RESEARCH」は調査捕鯨時代のもの。商業捕鯨となったいま、文字は塗りつぶされた

生息数や生態、食性……。クジラの謎や、生態系の仕組みを解明し、生息数を減らさないように利用する新たな捕鯨のスタイルを確立しようと考えたのである。だが、国際的な理解はえられない。二〇〇〇年代になると調査船団に対し、妨害活動が行われるまでに、抗議運動は激化する。

状況が一変したのは、二〇一九年のことだった。日本は、調査結果を一顧だにしないIWC（国際捕鯨委員会）を脱退する決断をした。実に、三十一年ぶりに日本の沖合で商業捕鯨を再開し、船に記された「RESEARCH」の文字を塗りつぶしたのである。

出港の汽笛が鳴った。

第三勇新丸に乗り込んだ船員たちは、思い思いにデッキに集まり、見送りの人たちに向けて、大きく腕を振る。懐かしい風景だった。

私は二〇〇七年夏と翌〇八年夏に北西太平洋の調査捕鯨に同行した。第三勇新丸を含めた捕鯨船団で、一四五日間の時間を過ごした。十数年前の出港の風景が蘇ったのである。

デッキに立ち、陸に別れを告げる船員のなかに、懐